



禪の友

ZEN
no
Tomo

6
2023



ご本山だより 大本山永平寺【叢林】

（そうりん）

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



六月になり、一層深い緑に包まれた永平寺は、当に坐禅修行の好時節です。

古来、禅道場を叢林と申しますのは、草木が群生繁茂するクサムラになぞらえ、道場に在つては、新到修行僧も古参雲水も悉く乳水和合、切磋琢磨して、参禅聞法、辦道精進を怠らぬ本来の寺院の在り方を意味します。

修行僧にはそれぞれ個性があり、長所短所、得手不得手、遅速緩急様々です。しかし、一たび叢林に入り坐禅すればそこは「クサムラ」、一見すると一面の鮮やかな緑です。各々の個性はすつかり隠れてしまい、まさに仏性の現成、仏の御いのちが現れます。

事々心にかなうはこれ損友

言々耳にさからうはこれ良友

甘甜何ぞ苦辛のよろしきに似ん

六月熱せざれば穀みのらず（月舟禅師）

不慣れな共同生活で、互いの個性が

ぶつかり合う事もあります。その都度角が取れ、丸みを帯びてまいります。

古老僧は「雲水の修行生活は、農耕の麦ふみをする時節に相当する。この時節をよく自覚して全精力を集中し精進辦道せねばならぬ。労を惜しみ粗略にすれば、株は太らず發育不良となる道理を忘却してはならぬ。花木果樹の育成にしても同様である」とのお導きです。

道元禅師さまは学道の用心に

動静大衆に一如し、死生叢林を離れず

とお示しです。

叢林での仏道にかなった衣食住、日常生活の起居動作こそ本当の平和な生き方です。

今生にて仏道に因縁があつたことを喜び、今日も雲水衆は切磋琢磨し修行に励んでおります。



ご本山だより

大本山總持寺

【ぶつそ仏祖の言句ごんくは家常かじょうの茶飯さはんの如ごとし】

『伝光録でんこうろく』第四十五祖芙蓉山道楷禪師章

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二



總持寺の境内に多くの紫陽花が咲くころとなると總持寺のある鶴見区は南風が吹くとともに、梅雨と重なり高温多湿の何とも不快を感じる気候となります。

「紫陽花や昨日の誠今日の嘘」

作者は近代俳句の祖と言われる正岡子規です。

「紫陽花が美しく咲いている。昨日が本当だったことが今日は嘘になってしまいうように日々色を変えながら」これは紫陽花の花の変化にたとえながら人のこころの移ろいやすさを詠んだ句なのです。

總持寺の多くの紫陽花も一雨降るごとに段々と色を変え入梅を知らせてくれているのです。

さて總持寺では六月五日から九日

の五日間、伝光会攝心が行われます。

期間中は坐禅に徹するとともに西堂さいどうであられる青山俊董老師あおやましんどうの講義による『從容録じようりゆうろく』を参究致します。

標題の言葉は「仏や祖師のお言葉は私たちが日常頂戴している茶や飯のようなものであって、それは一挙手一投足の日常茶飯事が全て仏祖の示した教えに適かなっている」との教えであります。

まさに瑩山けいざん禪師の示された「茶さに逢あうては茶さを喫きつし、飯はんに逢あうては飯はんを喫きつす」なのです。

思量分別を超えた清々しい境地がそのまま日常生活に活かされる時こそ、仏祖の教えが顕現している時なのです。

選・坊城俊樹

父の声母のこゑとも遠きぎす

埼玉県 浦宏之

評 雉の声のことである。「声」「こゑ」と表記を違えて父と母の声としたのは実感と余韻がある。雉は「ケーンケーン」と鳴くが、実際はもつと人声や動物の声に近く聞こえる。そんな声だから父母のことを思われたのだろう。この句は誰しもに共感を生む。

手の皺をしみじみ眺む啄木忌

静岡県 村松保子

評 石川啄木の忌日。「働けど働けど猶わが生活楽にならざりぢっと手を見る」の歌を下敷きにしている。この句はしかも「手の皺」に着目した。そこには人生の年輪が刻まれている。それをしみじみと眺めて今までのことを反省されたのだろう。人生諷詠の秀句。

◆ 涅槃絵図泣く象の鼻天仰ぐ 和歌山県 田崎よし子

◆ 大試験終へたる男子背丈伸ぶ 鳥取県 眞山博充

◆ 父母よりも永らへ点す彼岸の灯 山口県 御江恭子

◆ 仕出し屋の三和土に昨夜の年の豆 東京都 友野 瞳

◆ 日だまりに古事記ひもとく紀元節 静岡県 石濱 徹

◆ 青空の余白は花の舞ふところ 大阪府 柏原才子

◆ 春の星じつと見つめて歩を西へ 神奈川県 池亀恵子

◆ 鬼の眼のいつか優しき薪能 千葉県 甲斐 勇

◆ 誕生の礼を子に言ふ雪達磨 三重県 西村廣視

◆ あたかや牛の横膝沖を視る 長崎県 崎田定雄

選者吟

その中に菩薩顔して春の鯉 俊樹

作句小見 鯉というものはなかなか味わいのある顔をしている。菩薩さまに対しては失礼であるが、ある寺の池の緋鯉はまこと滋味のある顔をしていた。しかし誰かが餌をばいとやると、まことすばやく飲み込んでしまうのも可笑しくて俳句の句材となった。

選・長澤 ちづ

歩いてる強風にむかい歩いてる酒井阿蘭
梨の言葉を胸に

福島県 小原 富子

評 阿蘭梨のお話を伺った後の帰路なのだろう。その感動が伝わってくる「歩いてる」のリフレイン。現実の風とも、喩としての風ともとれるところも味わい深い。

声出して応援それが普通やで孫には不思議で耳を押さえる

奈良県 鈴木 重雄

評 三年にも及ぶコロナ禍で、声を出して応援し競技を観戦することがなかった。幼い子らは、コロナ禍以前を知らないのので騒がしいとは思わない。従来の日常に戻った喜びを口語で幼い子に伝えている。時代を表す一首である。

◆ 月曜毎少年ジャンプ買い求め津波に吞まれし息子に供う母
宮城県 須藤 智恵子

◆ 転院したても五十日面暗なくかくも細りて妻の逝きたり
岩手県 穴戸 さとる

◆ 残雪を見ながら山道帰りゆく住む人いない生家あとにし
岐阜県 瀧川 勝

◆ 筑豊にマッターホルンがあつた頃汽車通学にロマンがあつた
千葉県 甲斐 勇

◆ 正解は一つではないなればこそルビンの壺の試しもあるか
島根県 横山 豪吾

◆ 夜明け前流水分けて進みゆく鱈漁船を追ふは大鷹
島根県 宮廻 恒雄

◆ 線路脇田畑に代わりしらじらと太陽光のパネルが光る
山口県 橋本 美知子

◆ 美しき流れの水に物洗ふ母に凭れて聞きしせせらぎ
岐阜県 後藤 進

◆ 東風吹けばカランカランと絵馬ゆれて伯耆稲荷に桜花咲く
鳥取県 眞山 博充

◆ 「待望」という花言葉やわらかき苞にくるまれ露の葦萌ゆ
埼玉県 白藤 巳玲

選者誌

穴の空く器に水は溜まらずに溜まりてくさる

ということもなく

ちづ

作歌小見

日本の食の自給率の低さとエネルギー問題を考えさせる橋本さんの作品、三句目に作者の見解がさりげなく表現されている。後藤さんの初句「美しき」は「水」のことではなく、母との思い出そのものなのだろう。